



Good News for Japan **とぎのこえ**

弱者の友ーキリスト

吉田真



数年前、救世軍の運営する、ある地方の児童養護施設を訪ねました。応接間に座っていると、一人の女の子が近寄って来て、尋ねました。

「先生は東京から来たの？」

「そうだよ」

と返事をすると、

「いいなー！ 私も東京に行きたいなー！」

と女の子。

「どうして？」

「だって、東京に行けば有名人にたくさん会えるんですよ!!」

という返事。思わず笑みがこぼれてしまいました。その子は「有名人」に会いたいのです。わたしは笑ってしまいました。誰かが、似たような思いをもっているのではないだろうか。

社会的地位の高い人と知り合いになりたい、有名なタレントと話をしてみたい、お金持ちの友人をもりたい……。しかし、みずぼらしい、汚い服を着た、少し臭いのする人が前から来たら、思わず避けてしまう。多くの人のごく普通の姿ではないでしょうか。

高尚な精神をもつ人は……

さて、

「昔から、高尚な精神を、

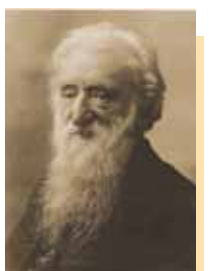
もつ人は、みな、弱者を忘れない。その人がどういう人であるかは、その人の、貧しい人、弱い人に対する態度を見れば理解することが出来る」

とは、ある先人の言葉です。

今から百四十七年前の七月、メソジストの牧師であったウイリアム・ブースは、ロンドンにおいて救世軍の働きを始めます。

当時、英国では、産業革命後の大きな経済の混乱の中、劣悪な職場環境での長時間労働などが一般化し、街には、街頭生活者、泥酔者、売春婦が多く見られるような状態でした。ブースは、

「彼らほどイエス・キリストの福音を聞く権利をもった人たちはいない」と思い、こうした人々の友となり、彼らに伝道を開始します。そして、言葉による伝道とともに、実際に福音を実行します。長時間労働を強いられるマツチ工場の少女たちのために、救世軍のマツチ工場を設立します。酒におぼれていた人たちのためには、更生するための施設を造りま



創立者
ウイリアム・ブース

す。街頭で生活していた人たちのために簡易宿泊施設を造ります。こうして、救世軍が始まりました。

今日、それと同じ精神で、百二十四の国と地域で、同様の働きが進められています。

弱者の友

ブースの思いは、実は、イエス・キリストのそれに似ていたものでした。

キリストは神の子であつたのに、人の姿をとつて、地上に生まれ、罪人の友、弱者の友、社会からつまはじきにされてきた人の友となり、最後には、罪人の一人に数えられて、十字架にかけられて死なれました。

しかし、三日目によみがえり、今も生きて、弱い者、自分ではどうしようもないと失望している人、社会の誰も相手にしてくれない人の友となつてくださるのです。

(救世軍士官「伝道者」・司令官)

謹んで震災のお見舞いを申し上げます。

一日も早い被災者の方々の心の平安の回復と、被災地の復興をお祈り申し上げます。



全国大会で救世軍の兵士になる (前列左から 4 人目)

救世軍に行くようになって、私は他の人々をお世話する、より深い方法を学びました。フィリピンで、私は聖書を教えることもしましたが、その時関心のあったことは、人々に伝道し、人々をキリストに導くことでした。けれども、救世軍では、世界中で、弱さを覚え、困っている人々の必要に応える活動を

賜物を活かす喜び

救世軍に行くようになって、私は他の人々をお世話する、より深い方法を学びました。フィリピンで、私は聖書を教えることもしましたが、その時関心のあったことは、人々に伝道し、人々をキリストに導くことでした。けれども、救世軍では、世界中で、弱さを覚え、困っている人々の必要に応える活動を

現在、私は「フロントライン」という上野小隊の賛美グループのメンバーの一人です。また、バイリンガル(英語と日本語) 礼拝でも賛美の奉仕をさせていただいています。主人や子どもたちも、聖別会やバイリンガル礼拝に出席してくれています。



英語を教えている幼児たちとのクリスマス

私は生きていく上での目的と、喜び、そして毎日を誠実に生きることの報いを見いだしました。自分の賜物を神の意志とは別に使うとすると、何かを成し遂げたとしても空しいものです。

伝えたいこと

私は生きていく上での目的と、喜び、そして毎日を誠実に生きることの報いを見いだしました。自分の賜物を神の意志とは別に使うとすると、何かを成し遂げたとしても空しいものです。

私の近くの救世軍を紹介してください。キリスト教についても知りたいです。「ときのかえ」の購読を申し込みます。

この部分を封書か葉書に貼り、裏面の下の救世軍にお送りください。

に再び来ることになりました。けれども、子どもたちと一緒に連れて来ることができませんでした。日本では、主人は仕事で忙しく、以前の友達は皆、フィリピンに帰っていたので、私はとても寂しく感じ、新しい友達を得るために、また神に祈る場所を求めて、教会を探しました。そして出合ったのが、救世軍上野小隊(教会にあたる)でした。

上野小隊に初めて行った時、ちょうど平日の祈禱会でした。私はその祈禱会で、子どもたちを日本に連れて来られるように、みんなに祈ってもらいました。それ以来、ずっと祈り続けて、二年後、二〇〇六年にやっとのことで二人の子どもたちを日本に連れて来ることができました。

していることに驚きまし。このことは、他の教会にはない、神のすばらしい手助けになっていると思います。ここに救世軍の良さがあると思います。私は、この救世軍で信仰生活を送ろうと決心し、二〇一〇年の救世軍全国大会で兵士として入隊(正式な信徒になる)しました。

教えることができましたが、二年前からは、さいたま市浦和のいくつかの中学校や小学校で、ALT(アシスタント・ランゲージ・ティーチャー 外国語指導助手)として、毎日英語を教えています。ALTになったきっかけは、友達から浦和の教育委員会が募集をしていることを教えられて、応募したことです。面接などを受け、採用されたのですが、自分がどうして選ばれたのか不思議です。そんなに教師に合っているとは思っていませんでした。父は昔から私に教師になることを勧めてくれていました。今考えると、これが神様のご計画のひとつだったのかな、と思います。

前には、必ず「神様、助けてください」と祈りながらやっていた。でも、日本の子どもたちは、とても素直ですし、教えていて、笑顔で答えてくれると、本当に教えるのが楽しくなります。また、給食の時など、私が食べる前に下を向いて感謝のお祈りをしていると、最初は心配そうに、「大丈夫？」と声をかけてくれる子もいましたが、お祈りをしていくことがわかると、「ああ、先生はクリスチャンなんだ！」と言ってくれる子もいて、自然な感じで信仰のことも示せています。

日本には、たくさんの方にいます。言葉や文化の違いで苦労している人もいます。そんな人たちに、これからも、困った時だけでなく、順調な時も教会に来る時間をもつことの大切さを伝えていきたいと思っています。



賛美グループで歌うことは喜び



すっかり日本になじんだ娘と息子と一緒に

〈信仰の体験談〉

自分の賜物を活かしていただく喜び



伊藤 フローレンス

長い人生の中では、自分が今どこに行こうとしているか、避けるべき障害物は何かをしっかりと見ることができるといい。道をはっきりと見ることができないような時もあります。細かいところを見ることはできないし、次の一歩をどう踏み出せばよいかわかりません。私の夢は、看護師になることでした。大学を卒業したあと、その夢を実現するための資金を貯めるために教師になりました。その後、一九九〇年に日本人の現在の主人と出会って、私たちはすぐに結婚しました。子どもも二人与えられました。でも、結婚生活でも、仕事をして経験を積んでも、私はしばしば自分に

そんな状況でしたが、私は聖書の言葉、「悲しんでいるようであるが、常に喜んでおり、貧しいようであるが、多くの人を富ませ、何も持たないようであるが、すべての物を持っている」(コリント第一 6:10 口語訳聖書)によって支えられていました。イエス様を信頼しながら生きる信仰は、一番大切なこと―自分にとってかけがえのないものであることがわかりました。

日本での再出発

二〇〇三年に、フィリピンの母は亡くなりました。次の年に、私は主人と日本

私はフィリピンで、生まれ育ちました。クリスマスチャンの家庭で、私は十人きょうだいの九番目です。家族は全部で十二人でしたが、全員が教会に行っていたわけではありません。子どもが大勢で両親は大変だったと思います。

ある日、兄が彼の行っている教会に誘ってくれたので、私はその教会の賛美礼拝に出席しました。そこで兄がたたくさんの人の前に立ち、聖書について教えている姿を見て、驚きました。静かにその話を聞いているとき、何か不思議な気がしました。だれかが私の頭に

触れて、あふれる喜びを私の内に注ぎ、それが外へ飛び出すのを待っているような、今まで想像したこともないような感じでした。その時、私は聖霊によってバプテスマを受けたのだと思います。こうして私は十六歳の時、イエス・キリストを私の救い主として受け入れました。これは、神との交わりの始まりであり、教会(神に栄光をささげる新生教会)で聖書を教える教師として仕える始まりでした。キリストに任せ、またキ

リストにある兄弟姉妹に仕えることは、大きな特権です。私は、神に忠実に従い、神の意志にそった人生を歩みたいと願いました。それが、私にとってすばらしい人生だと思いました。

その頃は信仰も弱くなり、聖書の言葉で心を守り、私自身を強くすることができなくなりました。私は忙しくて、散漫で、忘れっぽくなりました。生活の心配、金銭の問題、快樂の誘惑などは、私たちの心の呼吸を窒息させてしまい、霊的な成長を止めてしまいます。私は種々の状況に対応しなければなりません。生活の苦労、信仰面の試み、精神的な落ち込み、困難、悲しみ、苦しみがありました。

信仰が弱っていき、あまり動けなくなってきた数年後、神は再び私の人生に触れてくださいました。一人のフィリピンの教会の牧師が私をその教会の交わりに招いてくれたのです。やがて、私はそこで賛美リーダーとなり、教会での奉仕に喜びをもてるようになりました。神は私が信仰の旅を続け、自分の賜物をもって奉仕するように導いてくださいました。フィリピンの教会では、社会に対してたくさんの方を活動させています。伝道や地域のための祈り、聖書の学び、青年のためのプログラム、チャリティコンサートなど。私もそれらのことに参加するようにになりました。



主人(隆夫)と共に

創立者 ウィリアム・ブライス 大將 リンダ・ボンド (万国本営 英国 ロンドン) 日本司令官 吉田 眞 (救世軍本営 東京都千代田区) http://www.salvationarmy.or.jp E-mail: webmaster@salvationarmy.or.jp



世界をみつめて

〈コンゴ民主共和国〉 難民支援

アフリカ中央部にあるコンゴ民主共和国は、政府軍と反乱軍の戦いによる内戦が激化し、多くの避難民が生まれています。彼らのほとんどが着の身着のまま家を離れました。国内の難民キャンプにとどまっている人々もいますが、多くは東の国境を越えて、ウガンダやルワンダ、ブルンジなどに逃げて来ています。ルワンダのある難民キャンプには、2,500人収容の所に8,500人も入っており、水や食料などが不足しています。ほとんどのキャンプが同じような状態です。



救世軍国際本部はウガンダに20,000USドルを送り、難民の衣服や食料、また乳幼児のいる母親への必需品を供給できるようにしました。コンゴ民主共和国へは、10,000人以上の家を追われた人々の食料のために20,000USドルを超える支援金を送りました。ウガンダにおいては、どのような支援が最も必要かを調査して、実行に移す予定です。

コンゴ民主共和国の難民を受け入れている上記の3つの国々で、救世軍は資金の許す限り、最善のサポートを続けていきます。

〈グルジア〉 洪水被災者支援

5月13日、集中豪雨に見舞われました。首都トビリシでは、土砂崩れや川の増水による洪水が発生し、家ごと流されたりして

5人が亡くなり、乗用車やバス数百台が水没しました。被害は、貧困層が集まる一帯を直撃しました。また、東部の国境近くのラゴデヒでは、350家族が家畜や穀物を失いました。救世軍はすぐに救援活動を開始しましたが、当初、大きい物資の輸送が困難だったため、米や砂糖、油などの食糧を小さなパックにして被災者に提供しました。現在、救世軍は最も被害の大きいラゴデヒの行政と連携し、直接被災地の代表者に聞き取り調査をおこなって、必要とされる支援活動を進めています。救世軍の国際緊急災害支援本部より8,000USドルがこのために送られました。



〈日本〉 東日本大震災 被災地復興支援レポート(続)

引き続き、被災地の様々な必要や要請に応え、支援を続けています。5月には陸前高田市の高田保育所にお昼寝用タオルケットを120枚(カナダからの資金)、また、6月には同市の3つのコミュニティセンター(小友、モビリア、広田)に机と椅子(香港からの資金約300万円分)を、それぞれ提供しました。また、5月末、女川漁協の代表者が、作業船などの支援のお礼に香港の救世軍を訪ねた時は、災害支援事務局長が同行し、日本総領事とも面会、支援の報告をしました。



香港の責任者(右)と共に

これからは被災地復興支援の働きは続けられます。

2012年 克己週間募金 結果報告

この度の克己週間募金(3/1~4/30)へのご協力、ありがとうございます。心からの感謝とともに、下記のとおり結果をご報告申し上げます。

北海道地区	749,100
関東東北地区	1,853,840
東京東海地区	8,315,852
西日本地区	2,922,000
医療部	662,670
社会福祉部	2,180,986
士官学校	1,757,660
本営(本部)	146,633
全国合計	18,588,741

(2012年5月31日現在)



創立記念野外コンサート

6月3日、日曜の午後、日比谷公園小音楽堂でおこなわれました。公園に来た大勢の人が、涼しい木陰でバンドの演奏や合唱に耳を傾けていました。



タンバリン操練

救世軍とは

The Salvation Army



プロテスタントのキリスト教会で、世界百二十四の国と地域で活動しています。その特徴は、軍隊流の組織と伝道者や信徒の制服着用、そして社会福祉・医療・災害支援などの働きもおこないつつ、神の愛を伝えていることです。また、アルコール依存症者の回復支援の働きをおこなっているため、信徒はアルコール抜きスタイルをとっています。

創立は一八六五年。イギリスのメソジスト教会の牧師だったウィリアム・ブライスが、東ロンドンの貧民街で働きを始めた。日本での働きが始まったのは、一八九五年です。日本人で最初の救世軍士官(伝道者)になった山室軍平は、当時の社会問題に取り組み、娼婦運動の推進、結核療養所の設立、職業紹介所の開設などをおこない、キリスト教界だけでなく、社会福祉史にもその名を残しました。

現在は、四十六の小隊(教会にあたる)と十一の分隊(伝道所、二つの病院(ホスピス併設)、老人保健施設、特別養護老人ホーム、ケアハウス、アルコール依存症者支援施設など十九の社会福祉施設)で、働きを進めています。

(取扱支部)

救世軍は、統一協会、エホバの証人、モルモン教ではありません。これらの問題でお悩みの方は、右救世軍にご相談ください。

発行日及び定価

発行日 毎月一日・十五日

定価 一日号一部五〇円(〒六〇〇円) 十五日号一部六〇円(〒六〇〇円)

クリスマス特集号(十二月一日号) 一部一〇〇円(〒六八〇円)

一年分(二七〇円)送料七二八円

振替 〇〇一八〇五四四〇〇

発行兼印刷人 救世軍 代表者 吉田 眞

編集人 齋藤 恵子

〒101-0051 東京都千代田区 神田神保町二丁目十七番

電話 東京(03)三三七〇八八一

発行所 救世軍本営

印刷所 救世軍本営 図書印刷株式会社

(この欄に通信文を書くと第三種扱いになりません)